

## 創価教育学体系18の書評

塩原将行

2005年11月18日は、創価教育学体系（以下、「体系」という）第1巻が出版されて75周年の佳節にあたることから、現時点で創価教育研究センターで収集できた以下の18の書評を翻刻し紹介する。体系の書評は、体系第2巻巻末の書評だけではなく、当時の代表的な教育雑誌や朝日新聞等にも掲載されている。体系が、同時代にどのように受け入れられたかについて、今後の研究が必要ではないかと思う。

\*は、「体系」第2巻巻末の「(附録)『創価教育學體系』批判 其二」で紹介されている書評を意味する。

なお、できるだけ原文のまま紹介したいと考えたが、①紀要が横書きであるため、縦書きを横書きにした。②旧字体については、なるべく原文の香りを残したいという観点から、2004年段階でJISコードに登録されているものについては、極力旧字体を用いた。登録されていないものについてのみ、新字体に変換した。③判読できない文字は■とした。

「体系」の書評については、今後、さらに増える可能性はあると考えている。

### <新聞の部>

- |    |          |           |
|----|----------|-----------|
| 1* | 『中外商業新報』 | 昭和5年12月7日 |
| 2* | 『東京ニュース』 | 昭和6年1月1日  |
| 3* | 『教育週報』   | 昭和6年1月17日 |
| 4  | 『教育週報』   | 昭和6年2月7日  |
| 5  | 『教育週報』   | 昭和6年2月14日 |
| 6  | 『東京朝日新聞』 | 昭和6年3月27日 |
| 7  | 『教育週報』   | 昭和6年4月25日 |

### <雑誌の部>

- |    |                |           |
|----|----------------|-----------|
| 1* | 『環境』           | 出版日不明     |
| 2  | 『十勝教育會報』       | 昭和6年1月25日 |
| 3* | 『改造』           | 昭和6年2月1日  |
| 4  | 『教育論叢』         | 昭和6年2月1日  |
| 5  | 『教育學術界』        | 昭和6年3月1日  |
| 6  | 『帝國教育』         | 昭和6年3月1日  |
| 7  | 『教育時論』         | 昭和6年3月5日  |
| 8  | 『初等教育研究雑誌 小學校』 | 昭和6年5月1日  |

- |    |         |           |
|----|---------|-----------|
| 9  | 『教育論叢』  | 昭和6年5月1日  |
| 10 | 『國漢』    | 昭和6年5月20日 |
| 11 | 『レツェンゾ』 | 昭和9年4月1日  |

### <新聞の部>

1. 『中外商業新報』第16106号 中外商業新報社  
昭和5年12月7日・6頁 新刊批評

牧口常三郎氏の「創價教育学体系」を読む

一記者

すべての社会問題や人生問題の基礎は一つに教育によつて解決せられるのである、それから人類の幸福—文化生活の円満なる遂行を企圖するものもやはり「教育」であるともいへよう、實に社会、國家の今後について運命づけるこの偉力を規範する所の教育学の現状はどうか、わが國民教育とても一般文化同様、維新後移植された泰西文化の模倣に過ぎなかつたのである

◇

今回牧口常三郎氏は卅年來の體驗と倦むことなき學理の研究と、透徹した思索とによつて得た「創價教育学体系」（全十二卷）を世に問うたのであつた、これによつて模倣をこれ事とするわが國々民教育の萎微<sup>(1)</sup>を救済し、ひいては現代各方面における行詰りを打開すべき貴重な所産である

◇

從來の教育は抽象的個人を對象としたのであるから、倫理學と個人心理學を基礎科學としてゐたに對し、今後の教育は具體的社會人を對象としないから社會學と心理學（特に社會心理學）を重視すべきであることを、牧口氏はいち早く主張して來たのである、こゝに同氏から價值創造の教育の必要の叫ばれた所以がある

◇

本體系は勿論最新の社會學的見地から出發して、著者卅年にわたる専き實地研究による歸納的所産であつて、從來の概念哲學を棄て價值創造にその基調を置いたのである、氏の創價教育学はこの理論的基礎の樹立から、これを如何に表現せしむるかの論究にまで及んでゐる、即ち氏の教育学の機構によるその實踐を「教育政策」と「教授法」とによつて具體化してゐるのである、實にこれこそ本體系が歸納的所産である證左とすることが出來よう

◇

著者は「教育改造」にいつて次の五大要件を主張してゐる

- 一、教育の經濟化
- 一、系統的文化的教育法
- 一、教育擔當者の精選
- 一、教育の制度及方法の生産的創價的改革
- 一、學校即社會の觀念

即ちこれが氏の創價教育学の目的論であつて、これを實現すべく

[教育機關の改造] 教員の優遇 ▲ 師範教育の根本的改革 ▲ 小學校長登用試験制の實施

[學制改革] 半日學校制 ▲ 教科教材の教育力學習力の經濟的取捨

等の實踐について提唱してゐるのである

これ等の諸點からのみ見ても、本書が從來の教育體系の古き殻を粉碎し盡して余蘊がないと

思ふ、本書世に出てわが國民教育の前途に幾多の光明をもたらすことを喜ぶものは記者のみではあるまい

[創價教育學體系第一卷、四六版二五〇頁一円二十錢] 神田區南神保町九富山房

(1) 創價教育學體系では、「萎靡」としている。

## 2. 『東京ニュース』<sup>(1)</sup>

昭和6年1月1日

『創價教育學』批判

所謂芝區内市立小學校長三羽鳥と稱せらるゝ一部校長の深刻なる讒訴に由りて時の區長や一部區會議員學務委員連迄が夫れに乗ぜられ一時はどうなるかと思はれる迄の騒動の眞只中に泰然自若として微動だにもせず、切れるなら切つて見よと、いやに落ち付き拂つて教育家の威嚴を見せてみた。

牧口白金校長は其後同僚の鼠輩共が幾らじたばたしても知つて知らぬ顔で、隱忍自重の數月を過して遂に多年の宿志たる結晶が漸く生れ出る事となつた。

人も知る通り牧口校長は現代稀に見る人格者で、現代動もすれば幫間者流の校長の増加せんとする折柄氏の如き學識深く且つ人情に富む眞の教育家は、稀有であると云つても過言ではないのであるが、氏は曩に明治三十六年に早くも「人生地理學」と稱する浩瀚なる一大著述を爲し現時流行の人類地理學の第一の置石と爲し此書の公刊に依つて、我國の地理學が其の外貌を一變したといはれてゐる程の卓越せる識見と秩序ある學說の統一を爲したので有名であるが、今回又も此の數閱月の精進に依り「創價教育學體系」と稱する十二卷の大著述を計畫し、既に第一編「教育學組織論」、第二編「教育目的論」を一冊と爲せる第一卷を公刊したが、續いて第二卷第三編「價值體系論」が近日出版せらるゝ筈であると云ふ。

思ふに故デルタイ氏の價值教育論や稻毛詛風氏の創造教育論なるものは、何れも一長一短で完璧せる形式ではない。今氏の創價教育學は所謂前兩者を一丸とせる學說の様である。内容の順次發行を俟つて明瞭するだらうが、兎に角こうした刊行を爲す氏の博識と又努力とに對してでも充分に敬意を表する價值があると思ふ。殊に氏の本説は只單なる机上の空論ではなく、實際に氏の學校で教育しつゝある事でもあり、今後どこの學校でも直ちに應用して速効あるもので、本書の出版に依つて曩に人生地理學が世界の學證を一變せしめたと同様に、現時の我國の教育界に新軌道を示すべきを信じて疑はぬ。氏よ益々自重し精進してこの大學説を完結せよ。

(1) 創價教育學體系第2卷卷末付録により記載。東京ニュースについて詳細不明。

## 3. 『教育週報』第296号 教育週報社

昭和6年1月17日・7面

一小學校長の偉業

三十年がかりで

教育學書十二卷

牧口常三郎氏没頭の

「創價教育學」出づ

『人生地理學』の著者として約三十年前既に地理學界に名聲を博した牧口常三

郎氏はその後初等教育界に身を投じ、現に東京市芝区白金小學校長として、教育實際は勿論理論方面の研究にも努力してゐたが、この程その長年月に亘る研究の集積を整理して、『創価教育學體系』全十二卷(各册四六判二五〇頁)を著して世に問ふ所となり、その第一卷を發刊した。氏の創唱する『創価教育學』は人生の目的たる價値を創造し得る人材を養成する方法の知識體系を意味するものであつて、その中には社會學的、經濟學的意味が多分に含まれてゐる。氏は人生地理學大成後、文部省、茗溪會其他に關係し後初等教育界に入つたものであるが、從來の教育學が演繹的であつたのに慊らず教育の實際から歸納的に研究することを思ひ立ち、毎夜深更まで執筆し、晝間も寸暇を見ては記録した。一方理論方面に於ても、社會學經濟學等の専門家に就て研究を怠らなかつた。その間壓迫妨害等を受くる事もあつたが、氏は飽まで實際に立脚して研究を大成しようといふ決心で苦闘を續けて來た。かくてその研究物が數箇のトランクに溢れるに至つたが、氏は友人知己の徳憑により之を整理することを決意し遂に今回の擧を見たものである。初等教育實際家にして教育學を創唱建設したものは從來稀有のことで、氏のこの試みは教育界に對してかなりの反響を喚び起すものと見られてゐる。右出版記念の會が十二日午後五時から神田一ツ橋通り教育會館内で開かれたが、出席者は牧口氏を始め十餘名で、晚餐會後著者の梗概發表之に對する質疑應答、相互の意見交換等があつて多大の効果を擧げて十時散會した。

#### 4. 『教育週報』第299号 教育週報社

昭和6年2月7日・8面

嫌な感じのした『一』の字

牧口氏の著述に關して

御法ヶ丘五十彦

第一等とか、第一番とか、又は日本一といふ場合の『一』の字は良い感じのする『一』の字であるが、一訓導とか一小學校長とかいふ場合の『一』の字は卑められた様な否侮蔑されたやうな感じのする『一』の字である。

二

今回東京市芝区白金小學校長牧口常三郎氏が創価教育學十二卷を著作刊行せらるゝこととなり、既にその第一卷を公にせられた。學の構成を從來の演繹的方法に慊たらずして、歸納的方法に立脚されたことは氏が實際教育家として、當然採らるゝ態度であらう。學的評價の粗上に上るのはこれからであらうから如何に世の視聽に反映するかは未決の問題であるが、特別に多忙な帝都の小學校長に職を奉じ此の大業を成就せられ、世に問ふところあらんとする、牧口氏の努力と勇氣とは、實に敬服に餘りありと云ふべきである。氏は今より約三十年前人生地理學を著作刊行せられ洛陽の紙價を高からしめた篤學の士である。今回の創価教育學も必ずや、これによつて、一大センセーションを斯界に投げられることと思ふ。或は専門學者や、文献と思索に凝らるゝ學徒からは、その内容の深さに於て批評を妄りにするものもあるかもしれぬ。哲學にしても、一般精神科學にしても、唱ふる人の思想の根據が異れば、其の内容も組織構成も異つて、互に相反する論議をなす事になるのは當然である。意見が異なるから價値がないと斷ずることは出来ない。價値創造を教育の目的としたことは必ずしも創唱とは云へないかもしれ

ぬが、學の研究的 방법에立脚したといふことは、將來の教育學研究の方法的方面に大なる刺激を與ふるものではあるまいか。兎に角氏の研究的態度の眞摯なることと努力の大なること、勇氣の旺なること、而して亦内容の深刻豊富なること等、所謂學徒の一篇の論文的著作でないことは事實である。

三  
一體日本人は、傳統的の捕はれ根性がある。外國人の研究は無暗に有りがたく、日本人のそれは割合にもてはやされぬ。それと同じく大學教授や、博士の肩書のあるものゝ説は鵜呑みにして有り難がるが、名も地位もないものゝ意見は、如何に眞理を多分に含んでゐても一向問題にせぬ。近頃は大部分目が醒めて來たやうであるが、傳統的根性はなか／＼ぬけぬものゝやうである。しかし初等教育に關する研究や、兒童に關する意見は初等教育者の言を先づ聴くべきものであつて欲しい。とは云へ今の現状に於て直に斯くせよとは、流石に言ひ切る勇氣を私自身でさへ持たぬ。初等教育者が自分の職責に目醒めて一般の研究を積むことを要するからである。私は事實よりも今の場合は意見として述ぶる丈の勇氣しかないが、將來に於ては、兒童生徒の實際教育の事については、其處に職を奉ずるものゝ中に、最大の權威者があるといふ風にありたいと思ふ。然らば其の事については、其の事に職を奉ずるものが權威者を以て任ずる丈の研究を積むと同時に、社會は其の道の事は其の道の人を尊重する念を強くし、兩々相俟つて行かなければならぬと思ふ。かくてこそ、社會の文化は眞面目に進歩し發展し得ると思ふ。

四

我が牧口氏の如きは如上の意味から云ふと實に日蓮にも比すべき初等教育界の大先覺であり得るであらう。それに對し教育の週刊紙である教育週報が『一小學校長の偉業』と題された。『一』の字は、世間の通有觀念からいふと實に侮辱した文字の使ひ方といはねばならぬ。先日も東京市内で刊行せらるゝ教育新聞(1)に『一小學校長の方際でよくもこんな大事業をなし得た』といった様な記事があつた。内容は頗る褒め文句が並べてはあつたが、その時から『一』の字に甚だ嫌らず思つて居つた。然るに亦週報紙上に同じ様に『一』の字が使はれてあるのを見て、嫌だなど思つた。ちと神經を尖がらしか過ぎたかもしれぬがかくして眞止なる職を奉ずる小學校教員の自尊心を傷くる事夥しいものがあればせぬか。傷けらるゝことは構はぬとしても、これが爲めに教育を天職として奉仕せんとするものの信念を傷け牽いては、兒童教養の上に悪影響を及ぼすが如き事はないか。『一』の字を假りて所感の儘を述ぶる次第である。

五

斷つて置くが余は牧口氏に頼まれてこんなことを書いたのではない。尤も氏とは知り合ひではあるが、大に肩を持つてやうといふ程の親交さでもない。そこに何等の利害關係や打算的念慮からいはずとするのではない此の拙文を讀まれたら、氏自身は非常に迷惑がられるかもしれぬ。しかしもつと高遠なレベルの高い處に思念を惜がるゝ氏は、フンと鼻の先で笑つて見らるゝに過ぎないかもしれぬ。その邊の影響が如何あらうかは全く豫測は出來ないが、唯公にされた紙面に目を透したときの感じを、同じ紙上で述べてみたいと思つたまでである。

(1)「教育新聞」は未見。

5. 『教育週報』第300号 教育週報社

昭和6年2月14日・8面

創價教育學體系

牧口常三郎著

著者牧口氏は今より三十年前『人生地理學』の力著を世に送つた人で、現在は東京市白金小學校長として實際教育に携はりつゝ學的研究に努力して居る。今回その多年の研究を整理して『創價教育學體系』十二巻にまとめその第一巻を刊行した。從來の教育學書には歐米の翻譯、模倣か學者机上のものが多いが本書は著者が教育生活の實際から歸納した血の結晶であつて、『新しい教育學を實證的、科學的に蘇生せしめて、實際の教育生活に密接なる關係を保たせようとしたのがこの創價教育學である。』とは著者の言。有力な文献として推獎するに足る。

(神田區通神保町九、富山房、價一圓廿錢)

6. 『東京朝日新聞』東京朝日新聞社

昭和6年3月27日・6面 讀書

教育指導の原理

「創價教育學體系」第一巻

佐藤瑞彦<sup>(1)</sup>

「物理學者、必ずしも自轉車乗りの名人ではあり得なかつたり」「文法學者即名文家ではなかつたり」するやうに、「教育學者がことごとく教育者であり得なかつたりしてゐるのが、殊に、最近われわれの國の現状である。實際教育者ならざる者が、その思索よりも、單なる、讀書網の廣さから取得してまとめた理念や觀念やの塊りを教育學として公にする。心なき實際家は直にその余りにも觀念論的なものであるのにも氣づかずに、これを以て自分の仕事の指導原理たらしめようとしてつとめる。理論と實際との、明確せつ然とした分業所産である。これ、時代認識に欠除してゐる觀念論的教育學の割合に横行くわつ歩しつゝある所以でもある。

かゝる教育界の現状にありて、牧口氏の近著「創價教育學體系」はまづ以て、第一の意義を、教育實際者自らの體驗から生みだした教育の指導原理たるの點において、確保する。

教育者——それは必ず實際家でなければならない。教育學者も教育のことに與らうとする限りにおいて、彼自身、教育の實際家でなければならない。牧口氏は教育實際家である。われわれの國でも、疾うに實際者から、教育に必要な指導原理の組織體系がその體驗を通して生みだされてもよい年代になつてゐると考へられてゐた。その火ぶたを氏が切つたのである。だから、これこそ本當の教育學だといひ得られる。

この書の第二の意義は、社會が「教育」のすべてを規制するといふ所にハツキリした力點を置いたことである。すなはち「余は、新教育學建設のスローガンを提唱したい」といつて、「(一) 經驗より出發せよ。(二) 價直を目標とせよ。(三) 經濟を原理とせよ。」を擧げて居る。

難をいへばある。が、私は以上の三點からこの書刊行に意義を感じ、大いに續刊を待望してゐるものである。【四六判二五〇頁一圓二十錢神田通神保町九富山房】

(1) 佐藤瑞彦は、自由学園小学部主事。

7. 『教育週報』310号 教育週報社

昭和6年4月25日・4面

牧口常三郎氏の

創価教育學體系（第二卷）

爲藤十郎

牧口氏の創価教育學體系第二卷が出た。同巻には第三編價值論が収められてある。價值論は氏が最も苦酸を嘗め最も重要視して論究したものであるとは氏の述懐であつた。そこで、これだけでも是非精讀したいと希念して居るか、日々の仕事に追はれてその希念はまだ果されない。たゞ、やつと表面的な通讀だけ済したので、簡單な讀後感を述べて見たい。素より批判の段には至らない。

×

價值問題は古來最も難解な問題だとされてゐる。けれども人生が價值の追及である以上、人生と離れ得ない科學の研究に當つてはこの價值問題を回避する譯には行かぬ。氏はその序文中に於て『日々多忙なる生活に追はれてゐる吾々實際者にはとても悠長に哲學をなし思索に耽るなどの暇がないことは單に余一人のみの事情ではあるまい。従つて哲學的教育學が如何程進歩しようとも、斯道の學者達が如何に高尚幽玄の眞理を講じようとも、肝腎の實現相手たる實際家には恐らくは容易に理解されるものではなからう』と述べて、實際家にとつては該問題の哲學的研究は到底不可能であると斷じ、之を経験的立場から研究するの可能を認めてこれに突入して居る『哲學者の研究が實際生活に役立つに至るまで尚遠慮なる前途がある。(中略) 思ひ切つて概念哲學の誑惑を脱却し、經驗科學を建設するでなければ、何時までも教育の革新は期し難いと思ふまゝに茲に至つた。』とは氏の價值論を草した眞意を披瀝したものであると見てよからう。

×

本書に論述してある所は、價值と教育、眞理と價值——認識と評價、認識觀、價值觀、價值の系統人格價值、評價法及創價法の七題目に就てある。

本書に於て、氏の最も苦心したであらうと見られる重大問題は、價值體系の更改である。眞、善、美の價值體系に就て、これまでの哲學界に於ては誰一人疑問を挿むものがなかつた。然るに氏は考察の結果、眞理と價值とは全く別異のものである事を知り、從來の價值體系から眞を除去し、新に利を加へて、利、善、美の新體系を作つた。これは可なりに重大な問題で學界に講論を捲起す事であらうしその結果これが容認されるか否かは未知の問題である。

また小西重直博士の『聖は眞善美を兼攝して眞善美以上の新しき特性を有する渾然たる一新價值なのである。』といふ意見に對しても異論を唱へ『結局は利善美以外に價值を分類することが出来ないではないか。』と。これにも小西博士から駁論が出る事であらう。

×

氏の所論の是非正誤は、今日の處處に評定は出来ないであらうが學的良心に忠なるの氏が、敢然としてその所信を俎上に供した事は眞に敬服の外はない。

序に文章について一言したい。一般に學的表現の文章には難解のものが多い。本書はその點から見て大分平明になつて居る様に思はれるが、尚一層之を讀み易くするために、成るべく専門的用語を少くし、抽象的説明に對する具體的引例を多くする事を希望する。氏の言ふが如く、教育實際家は頗る忙しい。これらの人々に提供するものとしては少しでも讀み易いといふことが効果的だと思ふからである。因に本書發賣所は神田區神保町九番地富山房で、定價は壹圓廿錢。

<雑誌の部>

1. 『環境』第10号 城文堂

出版日不明

創價教育學批判

東京府高等学校教授 甘蔗生規矩

(創價教育學體系第2巻巻末付録に紹介されているが、内容は『帝國教育』と同じため、本文省略。『環境』第10号は見つかっていない。)

2. 『十勝教育會報』第147号 十勝教育會

昭和6年1月25日・紹介

◇ 創價教育學體系 牧口常三郎著

曩に人生地理學を著して我國の地理學の潮流を一轉せしめた著者はその後沈黙を守ること三十年今回經驗より出發せよ。價值を目標とせよ、經濟を原理とせよ。學習力に於て教授力に於て、時間に於て、費用に於て、言語に於て音聲に於て、常に經濟原理を旨とし、文化價值を目標として進め、天上を仰いで歩むよりは、地上を踏み占めて、一步一步に進め、のスローガン<sup>スローガン</sup>を提唱して、尊き體驗と深き思索とのもとに純日本的な教育學を著作された。人生の目的たる價值を創造し得る人材を養成する方法の知識體系を詳述せんとするのが氏の企圖である、氏の前著人生地理學と共に從來歐米模倣に依つて自己満足に墮して居た我日本教育界に對して新生の道を教へられ又我々實際家には好指針となり得るものと信んずる。

尚本體系は全十二巻にて總論及各論と別れ定價は一冊金一円貳拾錢である。敢へて諸氏の一讀を奨む。

3. 『改造』第13巻第2号 改造社

昭和6年2月1日・新刊批評

牧口常三郎氏著

『創價教育學體系』

田邊壽利

一九三〇年を送らんとするに際して、牧口常三郎氏の創價教育學體系第一巻が世に出た。三十年前學界の耳目を聳動して十版を重ねた『人生地理學』の著者によつてもなされたこの『創價教育學』は、我國今日の社會意識に對して如何なる意義をもつものであるか？

牧口氏がオリジナリテに富む學者であることは、三十年前に於いてすでに證明済みである。氏の『人生地理學』は、社會及び社會學の意識の上に執筆されたものであり、我國の地理學の方向を全く一變したといはれるものである。氏は社會及び社會學に對する關心は、新著の『創價教育學』に於て愈々強烈に現はれてゐる。而して氏は、社會の觀念を中心として教育學を論じ、教授法を説き、教育制度を批判してゐる。この點に於いて創價教育學は、曾て人生地理學が我國の地理學に與へられたと等しい革新を、我國現下の教育學及び教育に與へられるものであると考へられる。

著者は『余はカントをしてオーギスト・コントが社會學を發表した後に出でしめば、必ず喜



んでこれに賛成したであらうといふことを断定するものである』と言ふ。すなはち氏の教育學に於いては、概念哲學は實證的社會學によつて完全に克服されてゐるのである。また言ふ『是迄の哲學的教育學は、倫理學と心理學の基礎の上に樹立されようとして、遂に今日に於けるが如く、實際の教育者には殆んど價值を認められぬ程に、教育實際家から敬遠されるやうになつた、……。此の時に當つて、實證的態度によつて社會學を建設し、且つ社會學の基礎の上に教育學を築き上げて吾人を啓發したデュルケム氏の思想は、本邦の教育學界に一大革命を將來するものといはねばならぬ』と。

三

我國の教育學者及び教育者達は、社會科學を敵視してゐるかのごとく思はれる。しかしながらこれ程非常識なことがあり得やうか。社會を離れて何處に教育があるか。社會科學と絶縁して如何にして教育學が可能であるか。社會を無視せんとするイデオロギー。そのイデオロギーによつて支持されてゐる教育。この教育は今までに如何なる果實を齎したか。曰く學校騒動。曰く受験地獄。曰く就職難。これ等の果實の味が如何に辛いものであり如何に澁いものであるかは、現代日本人の何人もが経験したところであらう。

このイデオロギーの所産たる教育學を、教育制度を、教授法を、徹底的に革新し、社會と教育とを、教育學と社會學とを完全に結びつけんと企圖するものが、牧口氏の創價教育學である。故に氏は言ふ。『今後の吾々教育者は、何を措いても社會學の攻究を怠つてはならぬ筈である』と。

四

牧口氏は、『人生地理學』の上梓以來三十年、或は文部省にあつて或は東京市の小學校長として、教育の實務にたづさはつてゐる人である。生きた教育者であり、生きた學者である。机上の空論によつて教育を遊戯化せんとする、所謂學者ではない。氏の所説は教育を社會のあらゆる角度から眺め、社會の文化的斷面と經濟的基礎とを十分に顧慮したものである。それ故に最も安じて世に推奨し得るものである。

牧口氏は、未だ曾て自己の所説を權力の下に屈服せしめたことはない。氏は現に、東京市の最優秀校たる芝白金小學校長であるが、威武に恐れず金錢に迷はざる氏の高潔なる性格は、あらゆる暴壓と闘つて信ずるところを常に貫徹してゐる。怯懦なる無氣力なる我日本の教育界、殊に醜聞渦巻く東京市の教育社會に於いて、氏の存在はまさに泥中の蓮であるといはなければならぬ。(東京麹町區九段坂下牛ケ淵、富山房・定價一圓二十錢)

4. 『教育論叢』第25巻第2号 文教書院

昭和6年2月1日

創價教育學大系

牧口 常三郎

創價教育學とは人生の目的たる「價」<sup>(マツ)</sup>を創造し得る人材を養成する方法の知識體系を意味すると著者は言つてゐる。本書は過去三十年に亘る著者の學的精進の結果である。社會學的基礎の上に立つを特色とする。全部十二巻より成る。本書はその第一巻で教育學組織論、教育目的論の二編を収む。第二巻は價值體系論、第三巻教育機關改造論、教育制度改造論、第四巻教育材料論、教育方法論以上が總論で第五巻以下は道德教育、綴方、讀方、書方、地理、郷土科、算術、理科、歴史の各論、氏の長年月に亘れる教育體驗は、本書を單なる理論の開陳に止めず、實際役に立つものたらしめるを疑はない。紙數第一巻四六判二五〇頁、定價壹圓貳拾錢東京市外上大崎三三六、創價教育學會發行。東京神田富山房發賣。

5. 『教育學術界』第62巻第6号 モナス

昭和6年3月1日・新刊紹介

創價教育學體系（第一巻）

牧口常三郎氏著

本書は地理學者としてかねて周知の牧口氏が、二十年間の思索と経験との結晶として全十二巻の第一巻として著はされたものである。「創價教育學とは人生の目的たる價値を創造し得る人材を養成する方法の知識體系を意味する」と緒編開卷に於て説破してゐる。内容は教育學の價値的考察、教育學の本書、教育學の研究法、教育學の組織内容教育目的論である。研究態度の眞摯なる凡て教育研究者の伴侶として好個のものである。(東京市外上大崎三三六創價教育學會定價一圓二十錢)

6. 『帝國教育』第583号 帝國教育會

昭和6年3月1日・自由論壇

ブックレビュー 牧口氏の「創價教育學」を読む

甘蔗生規矩

學校で學んだ事は役に立たぬとは久しい間聞かされて來た嘆聲である。處が學校で習つたことだけで十分間に合ふ社會がある。教育界がそれだ。之には例證を擧げる必要はあるまい。それにしても此の如き對立は何がさせたのであるか。自分は率直に云ふ。教育界に進歩がないからであると。教育界は相手が何時も子供である。進歩がなくともやつて行ける。だから教育界には進歩がなかつた。けれども社會は常に進歩する。だから學校で習つたことは社會へ出ては役に立たぬ。けれども學校では立派に役に立つ。一體それでよいのであるか。無論悪い。だから現代のやうな陰慘な世相が現出したのではないか。學者は何をしてゐるのか。外國の知識の受賣ばかり。實際家は何をしてゐるのか。何時までたつても空手形の亂發ばかり。誰がこの後始末をするのか。

「我が國に於ける教育の學説は過去三十年の間にヘルバート派・實用主義・動的教授・自由教<sup>(ママ)</sup>・プロジェクト・メソッド・ダルトンプラン等々、恰も支那の政局の如く眩しく變轉を續けて來た。けれども夫は動搖極りなき上層氣流の動きにも似たものであつて教育の實際家にとっては殆ど何の影響もなく従つて何等の危險も亦利益もなかつたのである。我等は之を幸福といふべきであらうか又不幸と見るべきであらうか。」

とは三十年間ぢつと我國の教育を凝視しながら其の間絶えず輸入されて來る西洋の諸學説に一々細い検討を行つて、結局何等得る所なきを悟らしめられた我が牧口常三郎氏の述懐である。吾人は此處に氏をして再び其の大著述を世に問はしむるに至つた所以を知ることが出来る。氏は小學校の校長である。遂に十字架を負ふ士は現れたのだ。

二十餘年前氏が人生地理學なる一書を公刊して久しく沈滞してゐた我が學界に漸く進歩の素地を作つたことは既に世人の知る所である。吾人が敢て再々云ふ所以は此處に存する。

「實際の教育事業を母體とし之に科學者としての嚴肅なる解剖のメスを加へることによつて獲得する教育理論こそ永遠の生命を其の根幹に存するものでなければならぬ。余は實證學者の言や科學者の聲に無限の信頼と力強さを覺えつゝ此處に實際を基調とせる知識體系を創建し多年哲學的教育學に去就を決し兼ねたる本邦教育界に其の道標を打建てんことを唱導するものである。」

氏は明治以來六十餘年間に發表せられた學者の業績を悉く精細に分析吟味した。けれども自

己の三十年に亘る實際の経験を體系づけしめるに足るものは遂に得られなかつた。敢然として自ら立つことを餘義なくせしめられた氏はその立脚地を社會的實證主義にとつたのである。吾人が最も安心して氏の學說に聴き得る所以は此處に存する。又最も安心して其の著創價教育學を推賞出来る所以も此處に存するのである。

創價教育學全十二卷、漸く第一卷が刊行されたばかりで未だ批評の時機ではない。けれども市内の小學校長といふ激職にゐてよく此の大著述を完成し得たこと、それだけで既に驚嘆に値するものがあるではないか。況んやその文章といひ識見といひ學識といひ總て一代を覺醒するに足るものである。吾が國二十餘萬の教育者の爲に氣を吐くもの、而して其の全経験を照らして之に眞に進歩の生命を吹込み得るもの、之が此の書の眞面目であることを思ふと吾人は一日も早く其の全卷が刊行される日を鶴首して待つと同時に、所謂役に立つ教育が全國に行はれる日の遠くないことを感じて此の上へもなく愉快に覺えるものである。

## 7. 『教育時論』第1646号 開發社

昭和6年3月5日・新刊紹介

創價教育學體系

牧口常三郎氏著

牧口氏の企による「創價教育體系」は十二卷よりなり、第一卷より四卷までを總論とし、第五卷より十二卷までを各論とする大事業で、今回その第一卷（第一編教育學組織論、第二編教育目的論）を發表した。著者は三十年前「人生地理學」の著作を世に送つて、名聲を博した篤學者である。

この「創價教育學」は概念哲學によつてでつち上げたものでなく、著者が三十年間思索研究して生れた社會科學を基礎に置く教育說である。

教育は一つの社會現象である。だから教育は社會を無視し、又その社會の根基をなす經濟を看過することは出来ない。

この意識、觀點から著者は教育制度なり教授法等の革新を意圖してゐる。

眞摯にして熱力を有つ學攻者牧口氏は我が教育界に於ける偉大なる存在である。而して本書が、歐米學者の翻譯でも焼直しでもなくて、著者自身の貴い體驗の結果である事、それが本書の輝きである。（東京神田區通神保町九 富山房 一圓二十錢（第一卷）

## 8. 『初等教育研究雜誌 小學校』第50巻第2号 同文館

昭和6年5月1日・新刊紹介

創價教育學體系

著者 牧口常三郎

發行所 東京市神田通神保町

富山房

定價 壹圓貳拾錢

著者の序文から直接數語をかりて、紹介にかへ、敢へて蛇足を避ける次第である。

「價値を學說の對象として取扱ふに至つたのは他の諸學問に於けると同様アリストテレースの昔に始まる。爾來Kirchenväterより中世のSchälastikerを経て、文藝復興期及啓蒙時代の後を受け、十九世紀を通じて今日に至る上下三千載に亘り、甲論乙駁せらるゝに不拘、價値論は

未だ確然たる歸趣を見出し得ざる問題の一つである。他の未解澤の諸問題に於けると同様に價值論に於ても種々の貢獻をなす學者にして、價值論に於て限りなき困難に遭遇することを自覺し、且之を除却せんとして一の新しき體系を建設せんとするに決して頭腦の鋭敏舒述の明快を示さずと云ふではないが、此の困難を自覺し之を除却するに急にして、何故に價值論には此の如き困難が横はつて居るかの根本問題に想到するものは殆どない。價值論の最も深き病根は恐らく茲に存する。我等後進の學徒が價值に於て何等かの言をなさんとするのは先づ出發點を茲に求めて根本的に價值論を考究するの態度を避けてはならぬ」とは經濟哲學の權威故法學博士左右田喜一郎氏が大正六年の著書「經濟哲學の諸問題中の一節である。恐らくは近世の歐羅巴の哲學界に於て最も重要視されながら最も難解とされて居る此の哲學的價值問題を本邦に紹介し想唱し初めたものであらう。

當時余は氏の他の著書と共に座右を離さない一として鈍腦を鞭つて幾日も熟讀したものである。博士の如き明晰なる頭腦の人にして尚ほこの難境に苦心する状態が窺はれるに就いて大なる尊敬を此の書に拂ひつゝも、その難解には呆然たる事一切ではなかつた。爾來十<sup>(百)</sup>餘年難解に苦しみつゝも價值問題は常に余が腦裡を離れ得ずして、思想の自由を束縛し、余を苦しめたことは本文の劈頭にも告白した通りである。價值問題と余は何の因縁で斯くも執著を脱し能はぬか』……

#### 9. 『教育論叢』第25巻第5号 文教書院

昭和6年5月1日・新刊紹介

創價教育學體系 第二卷

牧口常三郎著

本書は曩に本誌に於て紹介した創價教育學第一卷第一編教育學組織論第二編教育目的論を承けて第三編として價值を論じたものである。今その内容の大畧を擧ぐれば、第一章が價值と教育、第二章眞理と價值、第三章認識觀、第四章價值觀、第五章價值の系統、第六章人格價值、第七章が評價及創價法である。氏は、價值論については三十年來頭を悩まして來たといふ。本書は三十年間の苦心の結晶とも見るべきもので、第二章眞理と價值は全く氏の創見に成るものである。紙數四六判本文二六六頁定價壹圓貳拾錢、東京府下大崎町上大崎三三六創價教育學會發行。

#### 10. 『國漢』第3号 富山房

昭和6年5月20日

創價教育學大系

全十二卷 第一卷既刊

定價 一圓二十錢

送料 十錢

牧口常三郎先生著

明治三十六年に人生地理學を著して本邦地理學の潮流を一轉せしめたこの篤學者牧口先生は、今亦創價教育學を提唱して行詰つた教育界に一新生面を與へんとせられつゝある。その緒言の冠頭に、

古代の傭兵の様に、己が領分である教育社會にも一顧されない様な舊來の教育學を棄て、新しい教育學を實證的、科學的に蘇生せしめて、實際の教育生活に密接なる關係を保たせよう

としたのがこの創価教育である云々。

と述べられてゐる。教育の經濟化と能率増進、明目的計畫的系統的の文化的教育法、教育者の優待と精選、小學校長登用試験制度論、師範教育根本的改革案、生産的創價的教育法、學校の社會化等々の彈丸を投じて、縦横無盡に論じ盡されてゐる。

東京府大崎町上大崎三三六

發行所 創價教育學會

發賣所 富山房

11. 『レツェンゾ』 4月号 紀伊國屋書店レツェンゾ編輯部

昭和9年4月1日

社会生理学から見た二三の文献

田邊壽利

(前略)

(五) 牧口常三郎氏の『教育改造論』

『人生地理學』の著者として知られてゐる牧口常三郎氏の『創價教育學體系』(富山房)は、社會學の上に教育學を樹立せんとするものであり、この意味に於いて教育社會學の文献として注目すべきものであるが、最近頻發する東京市、岡山縣、等々の教育疑獄は、我々をして右の「體系」の第三卷『教育改造論』を再讀することの必要を痛切に感ぜしめる。氏によれば教育制度は一つの社會的制度であり、したがつて現行日本の教育制度より生ずる害惡は、この制度を根本的に改修せざる限り根絶せしめることができぬのであつて、氏はそのために「小學校長登用試験制度」「國立教育研究所の設立」、「視學制度廢止」、「半日學校制度』等のごとき極めて機宜に適した改造案を提出してゐる。この書は昭和七年の刊行であるが、現下の疑獄を豫見、豫告せる點からしても、新らしく回顧され問題とならねばならぬ文献であると思ふ。(一九三四・二・二四。鶴沼にて)